

## 返り点の指導一案

— 『高等学校国語総合 改訂版』

を使って

池田 宏

漢文の入門期に、□の中に、返り点に従って読む順番に数字を入れるという練習を通じて返り点の使い方を習得させるという方法を、以前はとっていました。パズル感覚で生徒たちにはなかなか好評なのですが、ある時期から、このやり方をとらないことになりました。それは、必ず次のような間違いをする生徒がいて、その間違いがなかなか正されないからです。

□ □ □ □

という問題を出します。もちろん正解は

③ ① ②

ですが、

② ③ ①

という間違いをする生徒が必ずいるのです。それは「一」点がついているから、そこを一番目にしてしまうという間違

いなのですが、これを

学<sup>ニ</sup>漢<sup>文</sup>。

という問題にしたならば、「文」を一番目に読むことはありません。なぜなら、どう見てもこれは「漢文を学ぶ」という意味の文であり、「文」↓「学」↓「漢」の順に読んだのでは意味が通じそうにないことがわかるからです。また、□に数字を入れることで返り点を覚えてしまうと、高学年になっても、漢字の横に番号をふって読む生徒がいることも、こうした返り点の指導を見直すことにならなければならない。

では、今どんな方法をとっているかというと、生徒自身に返り点の使い方に気づかせるという方法です。

返り点・送り仮名を付した漢文と、その書き下し文を示したプリントを用意します。例文は教科書『高等学校国語総合 改訂版』（三省堂）の「訓読のしかた」の例文を使います。

王好<sup>ム</sup>戦<sup>ヒ</sup>。（王戦ひを好む。）

転<sup>レ</sup>禍<sup>ヒ</sup>為<sup>ス</sup>福<sup>ト</sup>。

人生感<sup>ズ</sup>意<sup>ニ</sup>氣<sup>ニ</sup>。（禍ひを転じて福と為す。）  
（人生意気に感ず。）

吾日<sup>ニ</sup>三省<sup>ス</sup>吾身<sup>ヲ</sup>。（吾日に吾が身を三省す。）

客<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>能<sup>ク</sup>為<sup>ス</sup>鶏<sup>ノ</sup>鳴<sup>ル</sup>者<sup>ト</sup>。（客に能く鶏鳴を為す者有り。）

不<sup>レ</sup>為<sup>ス</sup>児<sup>孫</sup>買<sup>ハ</sup>美<sup>田</sup>。（児孫の為に美田を買はず。）

他山之石<sup>ヲ</sup>、可<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>攻<sup>ム</sup>玉<sup>ヲ</sup>。（他山の石、以て玉を攻むべし。）

生徒に、書き下し文と、訓点のついた漢文とを比べさせて、「レ」とか「一」などという記号の働きを考えさせるのです。「レ点は、下の字から、すぐ上の一字に返って読む。」ということを生徒自身に気づかせるわけです。こうして返り点の働きを自力で理解したうえで、最初の教材である「五十歩百歩」で、下段の書き下し文と対照して返り点の働きを確認させると、生徒たちは「大いに納得」ということになります。

いけだ ひろし 駒場東邦高等学校（東京都）教諭。